

宿縁

十二月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番二十九号

浄土真宗
本願寺派
中原寺

TEL 〇四七―三七二一〇二九二
FAX 〇四七―三七二一〇二六二

親鸞聖人ご臨終

からのメッセージ



親鸞聖人が京都三条富小路の弟尋有の善法坊にて御年九十歳でご往生されたのは弘長二年(二二六三年)旧暦(陰暦)の十一月二十八日です。陰暦では十月、十一月、十二月が冬季ですから仲冬下旬ということになります。このときの状況を『親鸞伝絵』(親鸞聖人の曾孫にあたる本願寺三代目の宗主、覺如上人が聖人のご遺徳を讃えるために、その生涯の行跡を記述された詞書。親鸞聖人三十三回忌の翌年、永年三年に著された)にはつぎのように伝えていきます。

「聖人弘長二歳仲冬下旬の候より、いささか不例(病)の氣まします。それよりこのかた、口に世事をまじえず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらわさず、もつぱら称名たゆることなし。しこうしておなじき第八日頭北面西右脇に臥したまいて、ついに念仏の息たえおわりぬ。」

親鸞聖人が病に臥され臨終を迎えられた様子がまさに眼前に写ります。

「親鸞さまは、臨終の床に臥されてからは世俗の事柄は何も口にされませんでした。ただ阿弥陀さまのお慈悲のはたらきの深いご恩を述べられてお念仏申すばかりでありました」と。

私たちは「生あるものはかならず死に帰し、盛んなるものはついに衰えるきまり」を当然のことと知ってはいるものの、その解決を自身に問うことをしません。多くの人は、その時はその時で仕方ないと年月をおくるばかりではないでしょうか。

仏法を求める気持ちがいつこうにないということは、自分自身に向き合うことなくいつも世の中のこととは他人事と思ひ、あれやこれやと振り回されて生きていることで、これを有為転変といひます。その場その場をつくり世事に流されて終わる人生なのです。

親鸞聖人は臨終に際し「口に世事をまじ

えずただ仏恩の深きこと」をおつしやるばかりであったと申されます。死に臨んでは、この世で手に入れたと思うものは何一つわが身に伴うものはありません。愛しき妻も子さえも名譽も財産もすべてと別れ去って独りのち終わっていくのです。

親鸞さまは仏法を聞かせていただいたからこそ「そのことを心底きづかせていただき、この世に生まれた意味と正しいのちの行方に目覚めさせてくれた仏の真実に出遇うことができたわが人生は感謝するばかりであった！」というお姿は、私たちへの強いメッセージと受け止めなければなりません。

私の在り様は私には分かりません。私という存在を知らせてくれるのは私ではなく、私を超えた存在者「阿弥陀仏」(仏(さとり)の世界)なのです。

誤解をしないためには、仏法を聞かせていただくのは死の準備教育ではありません。朝に紅顔ありて夕べに白骨と化す風前の灯火のわが命を自覚し、死を克服し今あるいのちの尊さに目覚める生き方に転換するということです。

NHKテレビの「チコちゃんに叱られる」ではありますが「ボーっと生きてんじゃねえよ!」ということでしょうか。

さて親鸞聖人の臨終には、弟尋有や末娘の覚信尼がはべり、また越後から子息の益方入道や門弟の顯智房ほか数人が看取られたようです。翌二十九日には東山の麓、鳥部野の南、延仁寺で葬送火葬して翌三十日に遺骨を拾い大谷に墳墓を築き納骨したとあります。末娘の覚信尼はその事を十二月一日付けの手紙で越後在住の母恵信尼様へお手紙で

知らせました。その返書が「恵信尼文書」(大正十年に西本願寺の蔵から発見され国宝に指定)として残されています。

そのお手紙の内容は私たちにとても大切な示唆を与えています。恵信尼様は殿(親鸞さま)のご往生の知らせを受けて、夫婦の思ひ出、夫が観音菩薩の化身(生まれ変わり)と信じて生きてきたこと、親鸞聖人のひたむきで純粋な生活を書いています。そして最も注目すべきは次の文章です。

『殿(親鸞聖人)のご臨終がどのようなであられましても、お浄土にご往生されたことは、たしかであると信じています』

多くの人が安らかに死を迎えることがイコール信心であり、宗教だと考えがちな人間の妄想をきっぱりと断じています。末娘の覚信尼も多くの人に敬われ慕われていた(親鸞さま)の臨終が苦しまれたことを率直に如何か?と母に申し上げたのでしょうか。

不思議な縁で夫婦となり、共に念仏のみ教えをいただいて阿弥陀仏の光の中につつまれて辛苦を乗り越えた人生の喜びは、その疑問にはつきりと応えられたのです。

この世の生き死には、すべてさまざま原因(因)や条件(縁)が寄り集まって成立しているから、迷いの人間の思い通りになることはないのです。どのような思いがけない出来事にあうかもしれないし、また病気に悩まされ苦痛に責められて、心安らかにないまま命終えることもあるでしょう。臨終の善し悪しはいささかも問題ではなく、今、阿弥陀仏の間違いない願力の救いにまかせ身とさせていただく一つなのです。救いはこれからでなく、今を輝いて生きるためです。

【寺灯雑記】

○報恩講に向けお仏具磨き・清掃奉仕
11/6

十一月にしては異例の暖かさとなったこの日、お仏具磨きと清掃奉仕が行われました。今年、初めて参加くださった方を含めて多くのかたにご参加いただき、例年以上に境内の隅々まで心を込めてお掃除いただきました。お陰様で報恩講の前に、本堂内の仏具もピカピカになりました。ありがとうございました。

○帰敬式を受式

11/15・16

今年度の築地本願寺の報恩講中において当寺より五人の方が帰敬式(おかみそり)を受けられ法名を授与されました。

全員で二十九名が受けられましたが当寺門徒の山田憲典さんが代表して法名をご門主(代理)から拝受いたしました。

仏弟子となった自覚のもと一層聞法に励まれますよう念じています。

山田憲典様 山田克枝様 坂井克也様
坂井明子様 藤井京子様
おめでとございました。

○宗祖に感謝の法要、報恩講を勤修

11/20・21

昨年に引き続き、規模縮小ではありましたが、親鸞聖人のご苦勞を偲ぶ報恩講が勤まりました。

二〇日の逮夜法要は、「初夜礼讃」の読経、

親鸞聖人のご生涯を記した「御伝鈔」の拝読に続き、住職と前任職が法話をいたしました。

二十一日は晨朝法要に始まり、午後一時からの満日中法要では、ご参詣の皆様とともに親鸞聖人が顕わしてくださった「正信念仏偈」を唱和し、ご法話は山崎龍明師(東京都・法善寺)より「報恩講―私が私とであう集い―」の講題でお取り次ぎいただき、「本物を知らない人生は、本物でないものを本物としてしまう、親鸞聖人がお伝えくださった真実のみ教えを大事にする生きかた」についてお話しくださいました。

○「法縁廟」が完成、奉告法要勤まる

11/21

第二墓地に建設中だった中原寺合葬墓、法縁廟が完成し、二十一日の午前中に完成奉告法要を行いました。門信徒会役員列席のなか、廟前にて執り行われ、住職より「法縁廟の名前には、最近よく聞かれる無縁墓と違い、納骨される方すべてが縁として繋がっているのちであることが込められている」との挨拶がありました。

この法縁廟は、直接合葬のほか、家族単位で四名様分の納骨スペースを設けるなど、様々なご事情に対応できるようにとなっております。

法縁廟入廟の申し込みは十二月十六日より開始いたします。また、お問い合わせは、随時受けつけております

○お仏飯米進納

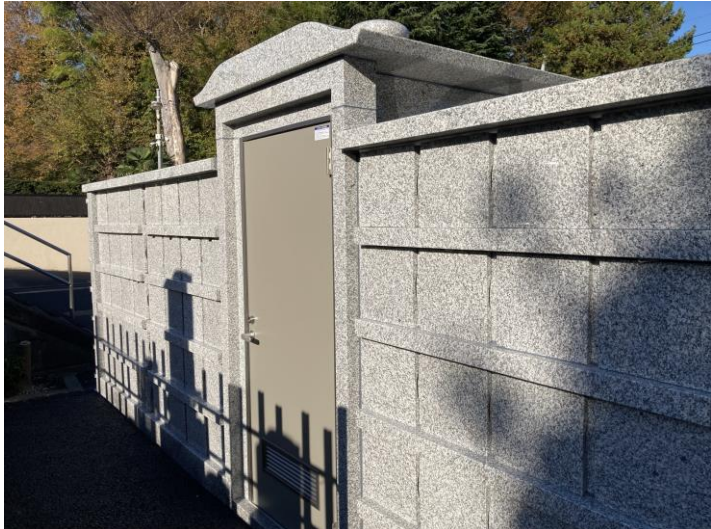
錦織春海様

○「法縁廟」の完成写真

正面より



後背部より



【法座・行事の案内】

○婦人会法座

十二月四日(土) 午後一時

『正信偈』を学ぶ(法然上人)

講師・前任職

○門信徒会役員会

十二月四日(土) 午後三時

(時間変更にお気をつけください)

○壮年会法座

十二月十二日(土) 午後二時

(時間変更にお気をつけください)

『仏説阿弥陀經』解説

講師・住職

○子育てサロン「パンダっ子」

十二月十三日(月)

午前十一時〜午後二時

途中参加・途中退室可

参加費・無料 事前申込…不要

いよいよパンダっ子が再開します！

○年末清掃奉仕

十二月二十五日(土) 午前十時

○教行信証を学ぶ(信巻―難治の機)

十二月二十五日(土) 午後二時

講師・前任職

○元旦修正会

一月一日(土・祝) 午前八時

お勤め『正信念仏偈』

住職・前任職 年頭法話

【十二月の掲示板のことば】

仏法を聞くとは

死ぬためではなく

どう生きるかだ